

# ぎふどうぼう

- 仏法との出遇い (川出昭順) ● コラムしょうしんげ
- 本願寺とお墓とお骨 ● 「救い」とは何か?
- 一枚の寫眞の記憶 —のすたるじっく・ふおと—

# 2012.02 106



「梵鐘佛具供出紀念法要」

1943(昭和18)年1月10日 於：羽島市小熊町恩立寺

## 一枚の寫眞の記憶

—のすたるじっく・ふおと—



敗戦間際に各寺院の梵鐘・仏具が、政府による金属供出令によって供出された。仏法の響きが世界中に広まるようにとの、願いによって作られたはずなのに、兵器へと姿を変えさせられようと

している梵鐘たちの前で、当時の僧侶たちはどんな思いを胸に読経したのだろうか。  
写真は羽島市小熊町恩立寺で厳修された「梵鐘佛具供出紀念法要」の時に撮影されたもので、

日付は1943(昭和18)年1月10日と記されている。  
中央に写っているのは、恩立寺前々住職・大橋祐亮師(故人)で、右端はお庫裡さんのレムさん(故人)。祐亮師は早くに母を亡くし、幼少期より姉弟の面倒をみながら、法務を手伝っていたそう  
で、後に竹鼻別院(羽島市竹鼻町)輪番(第33代)を歴任しておられる。  
また青年期には、新潟県(三条教区)に長逗留し、この地方のお寺を説教で回っていたそうである。  
レムさんは、その時寝泊まりしていたお寺の娘で、二人は恋に落ち恩立寺に嫁いで来たという。古老の話によると、ポックリ下駄を粹に履きこなし、まるでお姫様のようにであったそう。  
長距離恋愛といい、ポックリ下駄といい当時の羽島の田舎にあった、随分ハイカラなお庫裡さんであったことが窺える。

編集後記

高山市、飛騨国分寺の樹齡1200年の大イチョウ。地上6メートルの幹の中に、葉が落ちた冬にしか見ることが出来ない、謎の石仏がある。  
まるで、石仏のかくれんぼだ!! その石仏を見つけた時、きつと誰もが童心に戻ったかのようにホッと微笑むだろう。  
人と自然の思わぬ合作に「祈り」と時間の深遠さに  
出会うひと時だ。  
(摩耶)

今号から「一枚の寫眞の記憶—のすたるじっく・ふおと—」をシリーズで掲載してまいります。お寺の倉庫等に眠っている写真があれば、是非ともご提供ください。なお、今号のように先人方のお顔が載っている写真があれば、大変ありがたいです。もちろんお借りした写真は当編集委員会で責任をもってお返しいたします。ご協力をお願いいたします。



# 仏法との出遇い

川出昭順  
(第6組極了住職)

## 1 はじめに

還暦も過ぎたこの頃、自分の辿ってきた人生について考えることがあります。あの時、違う選択をしていたら、もうちょっといい人生があったであろう、なんてことは思わないでもないのですが。辛いことも多かったが楽しいこともたくさんあった。だから、差し引きゼロだと適当に思ってしまう。こんなことしか考えなかった自分が、そんなことどうでもいいよ、このこと一つの出遇いによって人生が変わった、都合のいい人生しか求めない自分が、辛かった出来事として受けて入れることが出来た。普通では考えられないにもかかわらず、都合のいい人生を求めていることが無意味に思えるほどの出来事が、仏法との出遇いであった。こんなことをこの

## 2 回心

### 善知識に遇う

二十代の終わり頃、インドへ行く機会に恵まれました。その旅行の折、列車事故に遭遇して九死に一生を得るといふ経験をしました。その時何を思ったのかというと、阿弥陀さんにお仕えしていたのでこのように軽傷で済ませてもらったんだと本心思いました。もう少しで断崖絶壁から転落するという恐ろしい事故でしたので、余計にそう思ったのでしょう。当時はそのように仏法を聞いていたわけでは、自我に光当たることなく、自我の迷いを深めていたのです。

次に出てきた問題は、お寺に参詣する人がどんどん減ってきたこと

## 3 浄土は間違いなくある

この出遇いで歩む方向は定まったのですが、本願が間違いなく私に働きかけて下さるよ、お浄土は間違いなくあるのだという確信は、まだまだいただけませんでした。このような個人的な話をするに多少の抵抗を感じながら書いています。今、一生懸命に聞法している若い人に何らかの参考になればと思いつつ書いています。つもりですが、どこまでも私個人のことです。自慢話になつてしまつていたらお許し下さい。

真宗聖典を読むことは困難なことです。少しでも聖典に触れていきたいということで諸先生の本を読んでいますが、あるとき、「帰の言は至なり」という六字釈(南無阿弥陀仏の意味解釈)をさがして、「至るといふのは、阿弥陀さ

## 4 最後に

若い頃から問題にしてきたお寺の参詣が減ったことは、浄土真宗寺院の共通の悩みです。どこのご住職も苦慮なさっていることと、思います。今後更にひどくなっていくのではないかと思います。しかし、あまりそこに囚われるのではなく、親鸞一人がための本願と言われる出遇いを確かめ続けることに尽きるのではないかと思います。

ます。そこに本願のお働きによって人が生まれてくるのであろうし、本堂に参詣する真宗門徒が一人生まれるのでしよう。東日本の大震災、原発事故、近くでは門徒さんの家族にひきこもり、鬱で苦しんでいる人がいる。どうしたらいいのかわかりませんが、真実の言葉を待つておられることだけは確かです。ここに、われわれ住職の仕事も自ずと見え

まが私に至つて下さる、真実が私に至っている」という言葉に出遇いました。目から鱗が落ちると言いますが、まさにそれでした。本願の働きをどういただいたらいいのか、もやもやしておりました。そのような疑問にこの言葉は見事に応えてくれました。自分自身の愚の自覚は、自らの力によってなされるのではない。真実の本願のお働きを私自身がいただいているから、愚の自覚がなされるのである。つまり、私に真実の本願が至っているから、愚を自覚できる。愚の自覚こそが本願の真実の証明であり、浄土を確信する出来事なのであります。

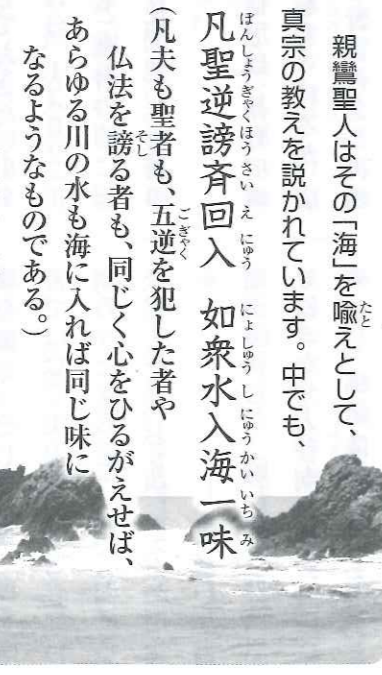
この言葉は前から何度も見ておりましたが、この事実が気付くことはありませんでした。書物を頭で読むだけではいただけに、体が受け取ると言いますか、自身自身の状況が大きく左右していることも一面ありました。どうしてだろうと考え続け、更に意のままにならない現実、苦悩を抱えたとき、そんなときが出遇う

## しょうしんげ

コラム

私は地球儀を眺めるのが好きです。くると回しながら、指でなぞっていると、たくさんの島や大陸が海でつながっていて、地球の大部分が海であることが分かります。地表の約70%が海だそうです。

親鸞聖人の著述の中には「海」という字が多く使われておりますし、正信偈の中にも「海」の字がいくつか出てきます。越後へ流罪になった親鸞聖人は、壮大ですべてを包み込む海を、実体験として感じられたのではないのでしょうか。地球儀や地図はおろか、地球という概念すらなかった時代でしょうから、感覚としての海の大きさは、今の我々よりもはるかに大きかったでしょう。



## 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味

凡夫も聖者も、五逆を犯した者や、佛法を誘う者も、同じく心をひるがえせば、あらゆる川の水も海に入れば同じ味になるようなものである。

真宗の教えを説かれています。中でも、何の違ひも区別もないと教えられているのです。まさに、ここに仏教の根本精神を感じることが出来ます。皆さん、今日のお勤めは「海」という字を意識して、正信偈を唱えてみてはいかがでしょう。

# 本願寺とお墓とお骨

## お骨

楠田昭裕

**■** 昨年の夏、現在は他宗派である浅草の浄土真宗東本願寺派本山東本願寺(旧真宗大谷派東京本願寺「東京別院」)に立ち寄り、どうしようもない寂しさで苛立ちを覚えずにはいられなかった。数十年前に見た風景とは様変わりしていた。境内には、石材屋が派手な看板を掲げ堂々と店を構えている。本堂に向かつて左側正面までお墓に占拠されている。ホールは、葬儀場、室内墓や永代納骨堂の慈光殿に造り替えられている。お墓、本堂須弥壇取骨、室内墓や永代納骨のご案内。3千万円以上の墓まで売り出されている。この宗派は、茨城県牛久市にブロンズ立像として世界最大の牛久大仏を造

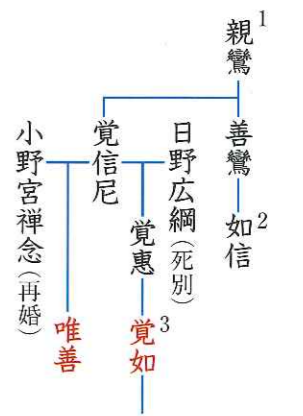


りてはならないものになってしまっている。お墓、本堂須弥壇取骨、室内墓や永代納骨のご案内。3千万円以上の墓まで売り出されている。この宗派は、茨城県牛久市にブロンズ立像として世界最大の牛久大仏を造

営。その胎内では、宗教不問の取骨と永代供養。骨に支えられた宗派本山であるといっても過言ではないと思う。

**で** は、我が真宗大谷派はどうか？親鸞聖人は、「某親鸞閉眼せば、賀茂河にいて魚にあたうべし」と言われたが、本願寺とお墓とお骨の歴史はいつからか。

- 1272(文永9)年 親鸞聖人入滅より10年後、娘覚信尼が聖人の遺骨を東山大谷の地に移し、廟堂を建立する。
- 1274(文永11)年 小野宮禪念が廟堂の土地を妻覚信尼に譲る。
- 1283(弘安6)年 覚信尼が留守職を息子覚恵に譲る。
- 1301(正安3)年 唯善事件が起こる。(唯善とは小野宮禪念の息子)
- 1302(正安4)年 覚恵が留守職を子息覚如に譲り、その旨を門弟に通知する。
- 1306(徳治元年) 唯善が大谷廟堂を破壊し、聖人の影像を奪う。
- 1321(元亨元年) 「大谷廟堂」が覚如により寺院化され、「本願寺」と号し成立する。



ここで注意しておきたい出来事がある。それは、1302(正安4)年、覚恵と唯善の間に起こった留守職就任問題の「唯善事件」である。聖人の娘覚信尼は、日野広綱と結婚し覚恵をもうけるが、広綱と死別し、小野宮禪念と再婚。禪念より大谷の土地を譲り受け、

関東の門弟の援助で大谷廟を造り、管理する留守職をすることで生活の足しとした。覚信尼死後、禪念の子である唯善が留守職相続の権利を主張するが、幼かったので、義理の兄である覚恵が留守職を継ぐ。そして、留守職を唯善ではなく実の子である覚如に譲ろうとする。ここに、骨肉の争いが生じた。お互いに関東の門徒を取り込もうとし、成功した覚如が勝利した。敗れた唯善は、怒りにまかせ大谷廟堂を徹底的に破壊し、御影像(聖人の木像)と遺骨を奪い、関東へ逃亡した。東西両本願寺としては、唯善を悪者にし、遺骨は安泰とする必要があった。ところが、冷静に判断すると、唯善を悪者に仕切れないところがあり、聖人の遺骨も存在すると明言できないようにも思われる。さらに、教如上人の時代に分派した東本願寺にとっては、西本願寺からどのようにに分骨してもらえたかの疑問も残る。あるかないかわからない遺骨の存在が、現在の東西本願寺には、な

なくてはならないものになってしまっている。お墓、本堂須弥壇取骨、室内墓や永代納骨のご案内。3千万円以上の墓まで売り出されている。この宗派は、茨城県牛久市にブロンズ立像として世界最大の牛久大仏を造

### 東

本願寺は、浄土真宗「真宗大谷派」の本山で「真宗本願」といい、御影堂には宗祖聖人の御真影を、阿弥陀堂にはご本尊の阿弥陀如来を安置している。聖人の亡き後、聖人を慕う多くの人々によって聖人の墳墓の地に御真影を安置する廟堂が建てられたのが本願寺の始まり。東本願寺(真宗本願)には聖人の遺骨はないが、親族で亡くなられた方の遺骨を本廟に安置することを「ご縁とし、子孫の仏法のご縁となることを願って」、「相統講員真宗本願取骨」を奨励している。そのことを自明とするのではなく、ご門徒にその意味と意義をもっと明確に説明しなければならぬし、本

### ま

た、大谷祖廟整備費は約5億5千万円。大谷祖廟整備事業対策で教行信証(坂東本)カラー影印本を58万円で100部再頒布したが、2005年12月26日に頒布申込受付は終了し、再頒布の予定はないとして



いたのに、わずか4年余りで再頒布を決め財源に充てた。安易すぎないか。先に購入された方を騙したような形で再販したり、発行部数で競争心を煽るような販売の仕方には違和感を覚える。本来、真宗の根本聖典である教行信証(坂東本)は、美術品として財源に充てるべきではなく、真宗門徒にとってはかけがえのないものなので、むしろ、希望寺院には安価頒布も検討し勉強してもらった方がいいのか？こんな方法を用いてまで大谷祖廟を整備しなければならないものなのか？費用については、納骨された方々がある程度負担してもらい

### 本

願寺の資料によれば、現在

# 「救い」とは何か？

「岐阜同朋」編集委員 尾畑英和

## 「真宗同朋会運動」50年にあたって

昨年、宗祖七百五十回御遠忌が勤まり、本年は、真宗同朋会運動が発足し50年。「真宗門徒一人もなし」という深い自己批判から始まった純粹な信仰回復運動がこの「同朋会運動」であった。それは、古い因習に支配された仏教から、親鸞聖人の教えによって目覚めていく自覚道としての仏道への転換を意味する。この50年、大谷派教団は大きく揺れた。その全体が聖人の教えに帰ることを旗印に教学による宗門の再興を期すものであった筈である。

しかし、七百五十回御遠忌を終えて、私たちはどうであるか。自らを懺悔し、反省することもなく、自己批判する精神も持ち合わせることなく今を生きてはいないか。悲嘆すべき自己において救われる、これが真宗の仏道であると思う。

御遠忌お待ち受け事業の一环として、「推進員養成講座」が開法の間として設けられ、宗派を挙げて進められた。

多くの組では、『現代の聖典』をそのテキストとし、有縁の経典『仏説観無量寿経』に説かれる「韋提希の救い」を読み解くことで、我が身の課題を明らかにしていく実践がなされた。聖人は教行信証・総序において、この「王舎城の悲劇」を縁に、韋提希、阿闍世、頻婆娑羅王等の業人が救われることで浄土の機縁が熟し、凡夫が齊しく救済される道が開かれたと歡喜をもって述懐される。

ここで、推進員の方々、また、そうでない有縁の方々とも共々に、この物語の登場人物が釈尊と出会い、そして自分と出会い直すことで救済されていく仏縁を通して、苦惱多き現代人の救いがどこにあるのかを聞思してまいりたいと思う。

## 「王舎城の悲劇」とは

お釈迦様の時代、今から二千五百年程前のインドのマガダ国に、頻婆娑羅王と妃の韋提希夫人が幸福に暮らしていました。しかし、なかなか子宝に恵まれず、ある時占師に観てもらった「山に住む仙人が三年後に死に、その代わりに太子が授かる」とのお告げがありました。ところが、三年間を待つことができずに王は家来を遣わしその仙人を殺します。

すると予言通り妃は懐妊します。そこで、再び占師に尋ねると「生まれてくる子は仙人の恨みがあるので、きつと生まれてきたら王に危害を加えるであろう」と予言しました。

それを恐れた王は妃を高殿に登らせ

せ、そこから子を産み落とし殺そうとしましたが、その子は指一本折っただけで助かったのです。その子は阿闍世と名付けられ、その後は王も改心しその王子を大切に育てていくのです。ところが阿闍世が成人したある日のこと、お釈迦様のいとこの提婆達多が、野心を持ってこの出生の秘密を阿闍世に告げ、その悪友の言葉を信じ阿闍世は父王を七重の室に幽閉し殺します。幽閉された後、父王に食へ物や飲み物を隠して与えていた母君を剣で殺そうとしますが、大臣の善婆と月光に止められ、殺すのは止め幽閉します。

世継ぎが欲しいという国王の切実な願いが家族の崩壊、親子の殺人に発展するという悲しい物語です。

## 「韋提希夫人の救い」を通して

王家とは、社会的、経済的に申し分のない家柄であり、殆どすべての願い事はその地位が欲望を満たしてくれるわけです。しかし、地位や財産ではどうしようもない問題がその周辺で起こってきます。人間が人生において本当に満たさ

れることの意味がそこに見え隠れします。我々は自分の思いが叶わなかったり、都合の悪いことが湧いてきたりするとその責任を他に押し付けることが多いようです。心のどこかで自分を責める私がい

るのも事実ですが、その辛さから逃れるために誰かに自分の正当性を訴えようとしています。

正に韋提希が夫とわが子の狭

間で苦しむ悲しむ姿。そして、「我、いま愁憂す」韋提希も同様で我が身の心をおつけ、苦しみを聞いてくれる人をここに遣わして欲しいと、牢獄から弟子の目連と阿難に来て欲しいと、釈尊に懇願します。しかし、その二人と共に釈尊も耆闍崛山から王宮にお出ましになります。そこで、我が身に起こった事実と真向かいにならざるを得ない状況になってきます。そして、韋提希は、身を投げ出して、釈尊にありつたけの愚痴をはきます。「世尊、我、宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる。世尊また何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷属たる」いわゆる責任の回避です。悲劇の原因が我が身の身勝手な行い(三年待てずに仙人を殺したこと)にあることに目を向けることなく、更には、釈尊にまで責任を転嫁します。

しかし、この場面が重要で、この愚痴と恨みのすべてをおつけることから本当の問題に向かつていく芽が生まれるからです。釈尊はその縁因を内に向かわせるべく沈黙を守ります。そして、もうこんな苦しい濁りきった世の中にはいたくないので憂いも悩みもない世界を教えてくださいと韋提希は懇願します。釈尊は沈黙を守りながらも、その願いを受け止め、諸々の清らかで美しい光に満ち溢れた諸仏の国々を見せていかれます。韋提希はこれらをつぶさに観察し、次のように釈尊に申し上げるのです。「世尊、このもろもろの仏土、清浄にしてみな光明ありといえども、我いま極楽世界の阿弥陀仏の所に生まれんと榮う。」しかし、ここで着目すべきは釈尊の見せた国々の中に阿弥陀仏の極楽浄土はなかったことです。では、いったい韋提希はどこに阿弥陀仏の世界を見たのでしょうか。諸仏の清く美しい国に生まれることをあえて願わず、阿弥陀仏の国に生まれたい、その願いは正に悩みに苦しむ私の前に寄り添い、共に悲しんでくださっている釈尊のお姿に「阿弥陀仏の浄土」を見出したということでしょう。韋提希は、自分のバツグラウンドを見据え、釈

尊の立たれている足元を見、そこに自分も立ちたいと願ったのです。釈尊は、耆闍崛山での法会を中座し、教団を乗っ取るべく阿闍世を唆した提婆達多が自身の命を狙っているにもかかわらず、危険をおかして王宮に向き、韋提希の身に起こった現実と真摯に向かい合ってくださいだったので。そして韋提希は、釈尊のその全体を見て、自身の進むべき方向、立つべき大地を感得したのです。無条件でありのままの私を認め、見守ってください。そして、私に力強

く生きていけるのです。その釈尊の姿に、韋提希は、「阿弥陀仏の浄土」を見たのです。我が身にふりかかる「事実」の中にこそ「真実」があること、そして、深い苦悩の内

に我々の立つべき大地があることを「汝、いま知りやいなや、阿弥陀仏、此を去りたもうこと遠からず」という釈尊のお言葉は示しているのです。そこに気付いた韋提希は、迷い苦しむ生き方を超え救われていくのです。救われること

によって自分の進むべき道が明らかになります。聖人はこの「韋提希夫人の救い」によって「浄土の門」(私たちのだれもが漏れることなく救われていく教え)が開かれたとただだかれていくのです。

私たち人間は「地獄、餓鬼、畜生」の我が身を生きています。それは、私たち自身が、他者との関係を絶つことによって孤独社会を生み、底知れぬ愛欲に塗れ、怒りと妬み棄てることができない「群生海」を生きているということ

です。しかし、「教え」という鏡に我が身を映し出したときに、はじめて「自分」が明らかになってきます。そこにこそ如来のご本願が私に限りなくはたらき、そのままの私を救ってくださいと願うことに気が付かれます。「浄土に生まれることを願う」とは、どうしようもない現実の中、「地獄、餓鬼、畜生」でしか生きることでできない悲しい我が身を「慙愧」していくことによって、この私が「仏陀(真実に目覚めた者)」にならせていただく歩みなのです。